

遠湖先生

編著品藻錄

第一集

特255

478



始



特 255
478



昭和十三年六月

編著品藻錄

第一集



内田周平氏 寄贈本

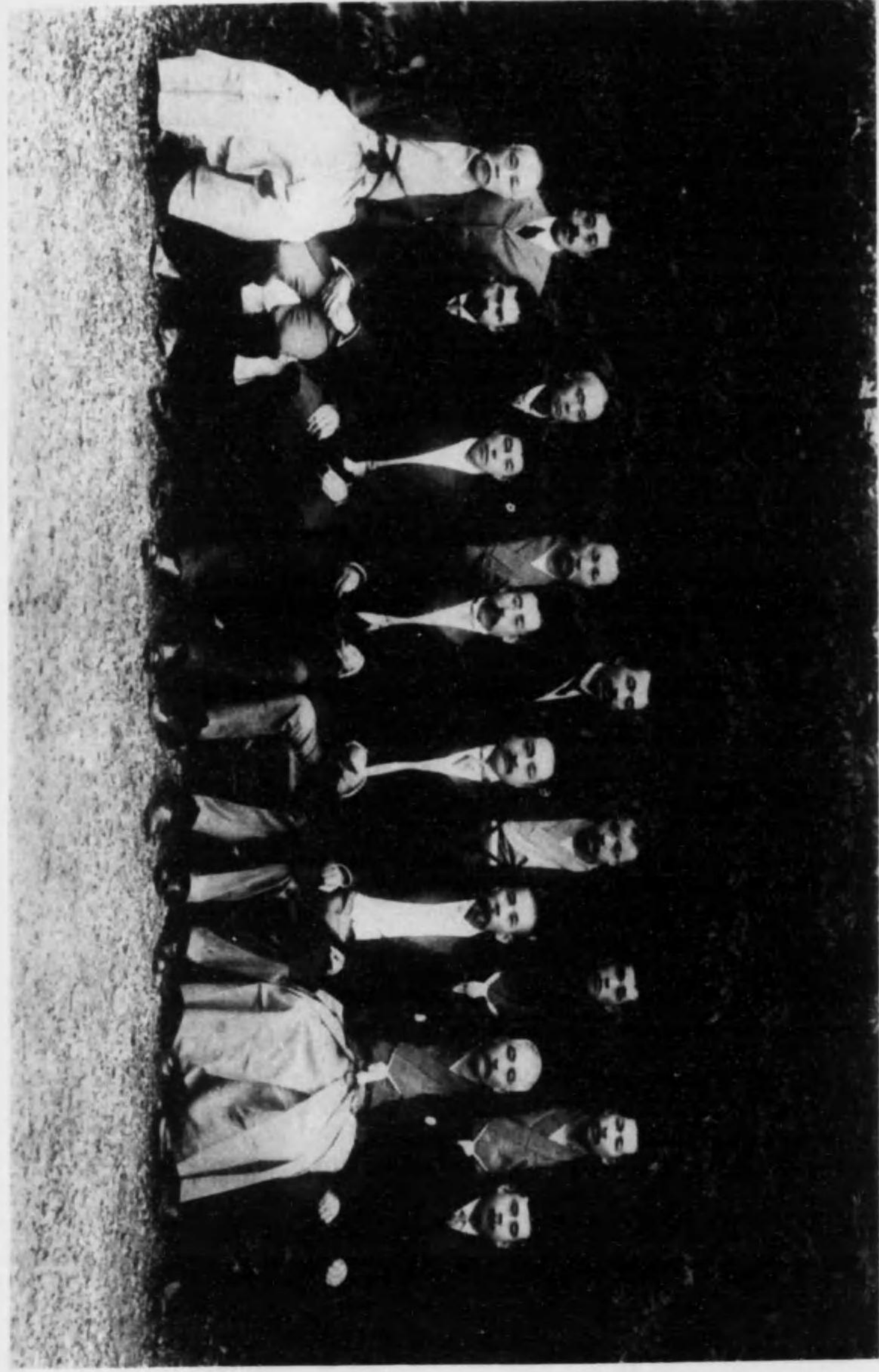
谷門精舍印行



明治四十四年六月十一日。寫^三於水道橋畔伯爵松平
賴壽邸內。

後列	三鹽、熊太	後藤秀穂	牧野謙次郎	姉崎正治	內田周平	小林正策	內田旭
前列	黑板勝美	松平康國	犬養毅	大木遠吉	徳川達孝	松平頼壽	內田正

是夕十五人相携。赴^二水戸義公顯彰講演會于神田青年
會館。



南朝正統論同盟十五人

會前。

長父十五人併對。其三水日義公離遠編將會于軒田青平

對	內	田	五	前	內	田	五
氏	小	林	五	策	福	島	義
	內	田	岡	平	外	平	博
	越	神	五	谷	藤	川	彭
	妙	裡	龜	大	木	彭	吉
	對	越	衣	藤	大	養	藤
	三	龜	熊	大	外	平	報
					黑	越	美

博義弘內。

即當四十四年六月十一日。其三水並歸朝日對外平

何れの時にや

長大息此事に

存候

所祝の刀江

賞月記熟

誦當年の

風流を追憶

し快適存候

牧野君にもしばらく

御無音心外

存候歸京の上は

舊友會同

排悶の一會を

遂げ度ものと存候

來書に對し

不取敢一簡

勿々不盡

九月十三日

大木遠吉

内田周平殿

朶雲拜讀

刀水觀月之

清遊を試みてより

已に二星霜

烏兔匆々

轉た感慨

に不堪候眼

を禹域に放

てば九弔士崩

國光宣揚

之好機空しく

看過する事

眞に痛敷の

至に不堪廟堂

之人材いとも

斗筭尋常

之小器のみ

憂世盡國

之士現はるゝは

(此の文中に書ける刀江賞月記は次葉に附載す)

(右大正二年九月十三日自大津市寄附書來)

(此の文中に書ける氏名實は別の大業の御書す)
 (天正五年八月十三日自大將市著書來)

之内田風平彌	之内田風平彌
大木藤吉	大木藤吉
八月十三日	八月十三日
後々不盡	後々不盡
不彈算一箇	不彈算一箇
來書に據し	來書に據し
筆の刻まのり春菊	筆の刻まのり春菊
將國の一會さ	將國の一會さ
書式會同	書式會同
春菊編京の上お	春菊編京の上お
時無音心や	時無音心や
外裡様ごもりおさへ	外裡様ごもりおさへ
し封齋春菊	し封齋春菊
風流さ貞節	風流さ貞節
福當卒の	福當卒の
賞且彌藤	賞且彌藤
預頭の内氏	預頭の内氏
春菊	春菊
長大息出事二	長大息出事二
同氏の朝ご子	同氏の朝ご子

及徳有縁
 刀五親目
 區區海濱
 巴之室嘉
 鳥免句
 軒筆故慨
 之流氣吹
 之高城放
 之九品壽
 國元空物
 之好梅也
 空屋事
 室之病難
 馬石臨
 之人我
 中者事
 之小息の子
 厚生盡因
 之王報
 守
 長息也
 可取
 置月也
 新
 風
 收
 器
 年
 之
 森
 柳
 一
 之
 向
 大
 中
 之

刀江賞月記

內田周平

明治四十四年十月八日。正當陰曆辛亥中秋。天籟大木伯謀賞月於刀江。招所知華族議員。儒士。騷客二十餘人。余與友人松平子寬。牧野君益偕赴焉。是日下晡。諸客會於二州橋畔。小汽船既艤在墨水。乃過豎川。入于中川。夕陽西沈。暮色蒼然。紅燈十數夾舷而點。與綠波相映。亦爲一美觀。於是衆成一列。圍一長卓相對。酒肴雜陳。把盃劇談。樂甚。將達新川。月出於鴻臺之南。如金鏡新磨。明輝照舳。涼風吹袂。衆不覺呼快。船蹴波而駛數里。月俄爲淡雲所翳。比近鴻臺下。雲翳乍解。一天如拭。月色千里。白露橫江。望瞻鴻臺。樹木模糊。宛然一幅水墨畫矣。按是宵丁里見氏軍敗。鴻臺陷前。一夕。使人懷古感慨不已。少焉。伯告諸客。出上甲板。有一人。坐彈琵琶。演吉野落川中島二曲。悲壯淋漓。聽者掩淚。曲罷。畫工幡山執洞簫吹之。其聲嗚嗚然。余卽起高誦赤壁前賦。子寬君益擊節和之。清國留學士孔君

繁錦又朗吟張繼楓橋詩。衆皆傾聽。君實尼山夫子七十四世孫也。時孤舟浮中流。而鏡月懸天心。光愈磨。氣愈澄。長風颯颯拂我衣。恍乎如羽化而登仙焉。既而下就席。或詩或畫。相共摸寫情景。還至二州橋。則已三更矣。乃各辭而去。因憶今春南北朝正閏論之起。伯尤慷慨激昂。欲爭之於上院。詰責首相。又與子寬君益及余等。登芳山。拜告延元帝陵。其意氣之壯。有如此者。而今夕之遊。則賞明月於孤舟。挹清風於長江。與余輩吟嘯相樂。又何其心胸之閒也。蓋亦彼此各一時也已。併記以供異日追念焉。

遠湖編著品藻錄 第一集(憶南集)

門人 佐伯仲藏 編

鵜崎鷺城



○『憶南集』を讀む (大正十三年七月二十
九日神戸新聞所載)

遠湖内田周平氏、頃日編する所の『憶南集』を余に贈り來る。前年南北朝正閏論の紛起したる時、筆戰舌擊の中に成りたる文章吟咏を主とし、諸友門生の詩文及び簡牘を集めて一卷と爲せるもの、詩中の語を取つて『憶南』と題せるなり。蓋し宋の文文山の『指南錄』・明の張蒼水の『北征錄』に倣ふもの歟。

氏は遠州の人にして、元と東京大學に醫學を修めたるも、中途に退學して儒學に志し、漢文に於て當代の第一流たるのみならず、經學の造詣に至つては、方今其の右に出づるものなし。而も學問は氏の硬直を忌みて博士號を與へざるも、氏は夙に草莽の老寒生を以て任じ、志士論客と交

り、詩文に親み、儒學を門生に講じ、以て意を功名利達に絶つ。氏は憂國の精神家にして、名教の頹廢、人心の委靡を慨し、事苟も風教の消長に關する問題に會すれば決して黙せず。是れ南北朝正閏問題に、乃木家襲爵問題に、奮然蹶起し、文章演説を以て政府を責め、邪説を排するに努めたる所以也。學問は賣るが爲にあらず、世道に貢獻せんが爲なりとは、氏の一生を貫く信條にして、大義名分の確立と綱常の扶植を疾呼する所以も、亦畢竟此の學問的見地に出づ。

辛亥の歲、俗儒曲學の徒、文部省の命に依り、小學日本歴史を改編して南北朝並立の體と爲し、其の間正閏輕重を論すべきにあらずとするや、國論爲に沸騰し、議會の大問題となりて、政府の地位將に危からんとす。内田氏は此の官撰歴史を以て我が國の精華たる大義名分に疑惑を抱かしむるものとし、正統大義の繋る所、流禍測るべからざるものあるを憂へ、殆んど死を決して排撃の急先鋒となり、以て正閏を辨じ王霸の尊卑を明かにす。政府乃ち反省して遽かに教本を改訂し、正閏順逆の論定りたるもの、氏の功多きに居る也。

事止むを俟て、氏は同人と共に延元帝陵を芳野に拜し、行宮の跡を賀名生に尋ね、南山懷古七首を得て歸る。其の一に曰く、

毎論正統憶南山。來哭當年天步艱。千樹櫻花看已遍。徘徊帝陵下。未言還。

和本二十六枚の小卷に過ぎざるも、氏の精神氣魄は詩文の間に磅礴せり。今や世を擧げて勢利

に趨り、士人の行爲亦道義を顧みざる時、忠愛思國の心を以て編せる此の書に接し、空谷に梵音を聞くの感なくんばあらず。氏が特に之を上梓して諸友に寄するの意も、亦世相に平かならざるが爲ならん。

尊著拜讀。時節柄世道人心に益する所少からず。小生關係の新聞に掲載仕候一文を切抜き封入致し候に付、御一讀可被下候。

七月三十日（大正十三年）

鶴崎熊吉

内田先生

侍曹

○内田翁の『憶南集』

（昭和三年三月廿三日）
（昭和日日新聞所載）

久木獨石馬

明治四十四年一月、桂内閣の時に、南北朝正閏問題といふのが起つた。これは國定教科書の歴史の本の中に南北兩朝を並立し、官軍賊軍等の名稱を削つてあつたのを、讀賣新聞の記者が先づ知つてこれを論評し、これを發端として、天下の大問題となつたのであるが、この時國體擁護團といふものを設けて、檄を四方に傳へ、大に運動して政府に迫り、遂に首相桂・文相小松原をし

て反省せしめ、その國史を改訂させた中心人物は、實に内田翁その人である。南北兩朝の正閏、何を以てこれを決すべきか、義を以てすれば南は正、勢を以てすれば北は大、しかも正不正を以て之を決すべく、大小を以て之を決すべからずといふのが、内田翁の大主張であつた。

その内田翁から先日『憶南集』といふ著冊を寄贈された。憶南とは南山を懷古する意味である。即ち翁の芳野山に遊んだ詩であるとか、門人諸家の國風などを纂録されたもので、憶南の情熱が全卷に溢れてゐる。さらに國體擁護團の設立主意書や、南北正閏を論ずる文などがあつて、當時に於ける翁の運動の、いかに勤王愛國的であつたかが想はれるのである。

しかも自分は本書を讀みて、もう一つ別に感じたことがある。それは今日の學生青年が、南北朝の正閏問題といふやうなことに、興味を惹かなくなつて來た傾向のあることである。尊王愛國の心が今日の青年書生に缺けてゐる氣味があると觀察する。即ち彼等は正不正を以て之を決するよりも、まづ大小を以て之を決せんとするの傾きがある。義を問ふよりもまづ勢を問ふ。楠公の精忠に感泣せずして、かへつて足利氏の豪なるに酔はんとする。かくの如き傾向氣風はいづれの處から來つたかと云へば、これは明治の藩閥政治家があまりに西洋崇拜の學問を獎勵したからである。勿論その外にも多くの理由原因はあるが、その重なる一つがこれであると自分は考へる。つまり長い間の文部省教育方針が誤つて居た結果である。而してまた現に米國崇拜の教育を施し

つゝあるのが、またその原因の一つとなる。妙齡の日本女子が「太いもゝ」を出して横行濶歩するのは、アレは全く米國の眞似である。さうして青年學生はこの米國式スタイルに感激する。文部省は滔々として人の子を賊うて、米國的たらしめつゝあるのだ。これでは到底南北朝正閏問題が判るわけがない。

日本には日本の教育があるべき筈で、何も好んで米國の眞似をするに及ばぬ。また英國を手本とするに及ばぬ。しかも悲しい哉歴代の文部省にその人なく、遂に今日の如き青年女子を作り出してしまつた。けれどもまだ遅くはない、覺悟如何によりてはいくらでもこの類風を一掃するこゝとが出来、即ち今日は第二第三の内田周平が協力して運動すべき時であるのだ。

○ 過日御高過之處、何之風情無之御粗末千萬、汗顔之至。高著憶南集御惠投被成下、只今郵到、早速拜讀了候。忠義之氣充溢一門、感服。不取敢御受迄。勿不悉。

桂五十郎

三月十日（大正十三年以下同此）

桂五頓首

○ 内田周平様

拜啓。益御清穆奉賀候。憶南集一冊御惠送被下、御厚情之段難有奉謝候。刀江賞月記・堀氏之紀事は、誠に面白く拜見致候。大東文化學會より四五日前雜誌を送附し來り候。御惠寄の雜誌は他へ相遣し申候。時下爲斯文御自愛專一に祈上候。右拜謝耳草々。

越後國加茂町

三月十日朝

古川郁太郎

○ 内田周平様

拜啓。近時復興に汲々たり、自然御疎遠の處、先刻は憶南集御贈與被下、早速拜讀仕候。舊版南北正閩論集焼失に依て、更に珍重を覺ゆ、多謝仕候。

東京市四谷區
平長町二

三月十日

内田勉平

○ 遠湖先生

謹啓。御名著憶南集壹部御惠投被下、難有拜受致候。開卷思ひを當年に馳せ、感慨無量に候。何れ拜趨御禮可申述候。先是以書中御禮迄。

東京市牛込區
南板町九

三月十一日

三鹽熊太

○ 内田先生

春寒益御清祥奉賀候。憶南集御惠贈被下難有奉存候。篇々血性所發、精神所凝、可傳不朽と存候。先は御禮迄、餘は讓拜顔候。草々頓首。

東京市小石川
區指ヶ谷町六
四

三月十一日

岡崎壯太郎

○ 内田遠湖先生

謹啓。春寒の砌に御座候處、先生には益御機嫌克被爲入候御儀と奉存候。爾來意外の御疎音に失し、申譯も無之次第、御海恕の程奉願上候。借昨日は高著御惠贈被下、難有奉鳴謝候。當年の事を顧み候へば、洵に感慨深きを覺え申候。先は右御禮申上度、乍末筆御奥様に宜

名古屋市東區
長堀町五丁目

敷御風韻奉祈上候。敬具。

三月十一日

内田 遠湖 先生

函丈

井 手 通

二白。其御面倒申上忍入候へども、南北朝正閏問題の際、小子亦驥尾に附して脚本「石山越」を草し、太陽紙上に掲載致し候が、東京より當地(名古屋)へ轉住の際、同雜誌紛失致し、爾後心に懸けて古本搜索仕候も、今以手に入らず、東京にては大震災後、もはや望み無き哉に有之、残念に存候。就ては先年呈上せし同誌、萬一御手許に御座候はゞ、頂戴願はれ間布や。併し十餘年前の事故、恐らく御無理の御願なるべく、最早御手許に御座なく候はゞ斷念可仕候も、爲念御伺申上候。再拜。

尊書貴著同時到着。春寒未退候所、益御清健奉賀候。扱憶南集印刷出來候に付、兩部御惠寄被下、早速拜見仕候處、詩文國歌金玉燦然、何れも大義名分に關するもの、當年の盛事を永久に傳ふるは勿論、現今壞亂思想の針砭たる可く、世道人心に關係ある御著作と存じ、永く寶重可仕、御禮旁申上候。但其内拙作をも御收載は耻入候得共、附驥尾永久に傳はり候は、光榮之

至と忝存し候。其内一部は明日學校圖書館へ納め可申候。先は不取敢御受御禮迄匆匆。

三月十二日

遠 湖 仁 兄

几下

富 三 郎

廣島高等師範
學校圖書館
廣島市大手町
九ノ一六一
服部 悔庵

拜啓。餘寒子今料峭を覺候處、文候益御清穆奉南山候。借被爲懸貴意、御著憶南集一冊御惠賜被成下、御懇志奉鳴謝候。開卷貴序の邊不取敢拜讀、未だ全編に及び不申候へ共、其内熟覽可仕と樂み居候。高篇御傑作居多と奉存候。小生風邪不快の處、一轉齒痛に化し、昨今困却罷在候。乍去強て仕事は致居候。謝辭旁拜受の證迄、寸楮如此に御座候。早々頓首。

三月十二日

内 田 周 平 先生

侍曹

鈴木丈之助

神戸市中山手
通七丁目三二

拜啓。春寒未だ凌ぎ難く候處、先生御はじめ皆々様御障りもなく入らせられ候や、御伺申上候。昨日は久しぶり學校よりの歸途御墓參いたし、「散る花のみだれし御代をしのびつ、袖しぼるらむ

一〇
御陵の前」を口ずさみつゝ、御令嬢様の御才藻を御しのび申上げ、家につき候處、恰も「憶南集」を拜受、偶然の事ながら塚本も歸りて、一入喜び申候。先日も雜誌頂戴、御禮も申上げず、何ともく恐入申候。

三月十二日朝

塚本内

東京市外雜司
ヶ谷龜原五
塚本松之助妻

内田周平先生

御令閨様

○
拜啓。餘寒去兼候處、益御佳適之段、欣慰之至に御座候。憶南集數部御惠投被下、鳴謝に不堪候。内一部は御内示之通牧野宮相へ回付いたし、附録には特に注意を促し置候間、左様御了知被下度候。不取敢御答迄乍略儀如斯御座候。勿々不悉。

三月十三日

千之

文部大臣江木
千之

内田先生

侍曹

○
拜復。先以御健勝御執掌之段奉賀候。然は此程は内田先生著憶南集御送附被下、難有拜受致

候。何れ閒暇を得次第拜讀可仕存候。就ては内田先生へ御逢の折も御座候は、何卒乍勝手小生深謝之微意御傳被下候は、仕合に御座候。先は御禮まで如此に候。勿々拜具。

三月十六日

牧野伸顯

牧野宮内大臣

江木文相閣下

○
拜啓。春雨霏微之候、御文飾益御清風奉欣賀候。陳は憶南集壹部御惠贈被成下、多謝此事に御座候。早速細讀仕候。拙吟も御編入被下、驥尾に附し微衷貫徹、實に幸慶之至に奉存候。製本體裁高尚優美、感服仕候。佐伯仲藏君文章一讀、篤志欽慕に堪へず、小生自後御交際申上度候。御面會之節、よろしく御傳聲願上候。次に兼而御斧正願上候拙碑文、御多忙中恐縮に御座候得共、尊臺御批評濟の上印刷に付し、廣く弊縣有志者に頒布、建碑資募集の都合に有之候。御承知の如く、衆議(醜偽)員選舉も追々切迫、競争激烈と相成可申候。其前に於て勸誘致度旨首唱者飯村丈翁より被申越候。事情御推察被成下、御寸暇の節御細評被下候は、大幸之至に奉存候。先は御贈本御禮旁右申上度如此に候。餘は萬後鴻に譲り候。草々頓首。

三月十三日

渡邊孚再拜

茨城縣結城郡
大花羽村花島

遠湖儒宗虎皮下

○ 謹啓。(上略) さて此度は憶南集御惠贈を忝うし、昔の事いろ／＼と想出し、なつかしく涙にくれ候。(下略)

京都市相國寺
東門前町

三月十四日夜

樋口 功

内田 先生

侍史

○ 肅啓。憶南集一冊御惠贈忝存候。吉野神宮御改築の議ある今日、十餘年前正聞の事定まりし當時を追懐する情、愈切なるもの有之候。頓首。

三月十五日

黑板 勝美

内田 周平様

○ 憶南集御惠送被下難有拜受。南山の櫻に六百年の昔を訪ひたき心地勃々として起り候。

三月十五日

姉崎 正治

内田 周平様

○ 肅啓。益御清祥奉賀候。陳は貴著憶南集御惠贈被下、洵に辱く、一氣讀了、當時を追想、不堪感慨、再三誦讀仕候。

よしの山花に泣きけむあに見れば

今なほぬるゝわが袂かな

先は御禮まで、匆々敬具。

遠江國新居町

三月旬九

岡部 讓

内田 周平様

○ 拜啓。憶南集一卷御寄贈被下、忝拜受、早速通讀仕候。當年御奮闘之御有様を想像致、今更欽仰に不堪次第に御座候。拙作一絶御笑草に呈覽仕候。過日も大東文化御惠贈被下、難有奉存候。いづれ入會可致心得に御座候。

先日御斧正願上候拙文一篇、御多用中恐縮之至に御座候へ共、近日御批正を得られ候はゞ幸甚奉存候。實は先方老人の事故、再三催促し來候次第、何卒御諒恕奉願候。先は御禮旁御願迄。草々頓首。

越後中頸城郡
板倉村

三月廿日

遠湖先生

侍曹

增村度次

一四

遠湖先生見贈憶南集。收芳山唱和詩及關南北正閏論争文書。卒爾賦一絶呈政。豈是尋常濟勝人。南山泣賦古陵春。爲儒不伍俗儒輩。大義論來筆有神。度次拜具。

肅啓。頃者憶南集一冊惠示せらる。披卷閲讀、當時を想起し、感無量に候。現時荆棘益塞道、吾人奮闘愈酣ならざるべからず。猶賜教示、幸甚之至に御座候。勿々拜具。

三月廿日

内田周平様

副島義一

東京市外駒澤
村上馬引澤二
三〇

拜啓。過日は雜誌御恵み被下候處、御返事も不差上失禮仕候。今日又憶南集御遺被下拜讀仕候。當時公憤御奔走、今日より觀來れば痛快の至に候得とも、其節は如何に御盡瘁被遊候御事と奉追想候。所載諸篇、安識忠臣痛入骨、後世徒誦瓊琚詞とも可申、感佩仕候。昨今の新聞に、南朝事實調査、長慶天皇を南朝五世に入るべきとか申候。當然之事と奉存候。願くは俗

越後五泉町
歌川兼太郎

三月廿一日

遠湖先輩梧右

兼再拜

吏之災厄に不罹様にと存居申候。大東文化之方も會員九人丈は募集致し、尙此外と存候得とも、當方殘雪尺餘、奔走も出来る陽春時を待居申候。幸に爲斯文御自愛奉祈候。先は謝忱迄申上度如レ此に御座候。不宣。

拜啓。此頃憶南集御贈與に預り、難有奉存候。繰り返し熟讀仕り候。難有厚く御禮申上候。特に南山懷古七首、感深く存候。御寸暇の節半折に其内の一首御認願上度存候。御多忙中恐縮に存候へども、御序の節に御願申上候。先は御禮迄草々敬白。

三月二十五日

内田周平様

國井和雄

名古屋市伊倉
町一

近來の著書、一も無可讀、無端先生の憶南集御恵投、洗手拜見仕候。洵に辱く御禮申上候。字々皆血、快痛、通讀二回、豚兒來訪、持去り候。兒亦極て南朝崇拜の者に候。乍疎略以葉書御禮申上候。近日拜趨可仕候。草々。

一五

東京市外千駄
ヶ谷四一九

三月廿五日

内田周平殿

一六

今田主税

東京市牛込區
下宮比町一〇

三月二十六日

遠湖内田先生

柿谷 碩

侍史

尚と過日拙文度々御加筆被成下難有、乍序此段御禮申上候。再拜。

拜啓。

磐城國平町五
丁目

三月二十六日

内田周平様

平松 武

御著書「憶南集」御惠送に預り、今朝有難く拜受仕り候。
先生の當年の正氣を大いに欽仰する次第に御座候。
先は拜受の御禮まで申述べ候。敬具。

拜啓。久々御無音仕居候處、御渾家愈御多祥奉賀候。陳者憶南集御發刊、御惠贈之榮に浴し、
難有拜讀仕候。今や思想混亂の時に當り、世道人心を益すること不尠、洵に發行其時を得たる
ものと存、爲斯道慶賀措く所を知らず候。(中略) 不取敢拜受御禮申上候。亂筆御宥恕奉祈
候。勿々。

三月二十七日

遠湖先生

道彦 頓首

梧下

東京市小石川
區戸崎町四五
小林道彦

拜啓仕候。其後は意外の御無沙汰に打過、御申譯無御座候。陳者春光融々の候、益々御清祥に

被_レ爲_レ在、大慶此事に奉_レ存候。却說今回は御高著憶南集の御惠與を辱_レうし、難_レ有_レ拜受仕候。拜誦幾回、義氣雷電の如く五内を震撼せしむるを覺申候。櫻花の下に捧讀して朗々として吟じ候は、愉快如何ばかりかと、未だ咲きやらぬ庭前の老櫻を眺めて、感慨之を久しうし候次第に御座候。不_レ取敢_レ御禮申上度、先は如_レ斯に御座候。敬白。

三月二十七日

諒

拜

内田先生

侍史

東京市外高田町大字豊川三八石川諒一

内田遠湖先生梧右

先生愈清健、不堪_レ敬賀。曩者木李之投、不_レ圖接_レ瓊琚之報、重複會_レ憶南集之惠。先生眷眷之至情、不_レ知_レ所以謝。北遊篇大作、既欽誦不_レ能措。今又將_レ飽_レ憶南集之佳作。開卷忽映_レ盲眼者、令_レ夫人之玉詠也。的是萬綠叢中紅一點、詞意共動_レ人不_レ淺、洵不堪_レ傾倒也。嗚呼慰_レ老生老後之落窶者、獨有_レ先生。爲_レ賜至大、感謝感謝。

三月念八

半盲老夫天民生拜復

東京市本郷區駒込林町一五七高橋宗之助

謹啓。憶南集

右御高著御惠贈之榮を蒙り、難_レ有_レ仕合せに奉_レ存候。謹而御禮申上候。頓首。

三月二十八日

池谷盈進

静岡縣沼津町香貫

内田遠湖先生

當年衆議自成_レ林。誰記中興烈士心。猶是鳥歌人哭處。延元陵上落花深。

讀_レ憶南集有_レ感

盈進再拜

慈斧

拜啓。益々御清適奉_レ大賀候。借過日は憶南集及附録御惠贈に預り、誠に難_レ有_レ奉_レ存候。早速拜讀、諸氏忠誠の氣、紙面に躍如たるを覺え申候。近來人心不安、邪說頻に行はれ、獨乙の國歩艱難を見て、他人事に非ざるを信じ申候。右不_レ取敢_レ御禮迄草々不具。

三月廿八日

津久井省己

内田周平殿

侍史

前橋市相生町四五

憶南集難有拜見仕候。令嬢御歌揮涙拜誦仕候。來月初旬上京之心得、拜趨御禮可申上候。頓首。

三月廿八夕

置鹽維裕拜

内田周平様

拜啓仕候。其後は御無沙汰に打過申譯も無之候。時下春氣に相成候處、皆々様御清健に被爲在候段奉_レ恭賀_ニ候。借今度御出版被_レ成候憶南集御惠贈被_ニ成下_一段々の御厚情、何とも御禮の申上様も無_レ之、深く銘肝仕候。忙手拜讀一過仕候。憶南集序の如きは、慷慨奮發、所謂忠愛思國之情、躍々生_ニ動紙上_一、有_レ使_ニ人髮豎毗裂_一之概、裨_ニ益名教_一非_ニ淺々_一也。その他刀江賞月記の如き、赤壁賦より脱化してその痕迹を見ず、先生近來の御傑作と奉_レ存候。憶南七絶、亦悲壯淋漓、不_レ許_ニ人追隨_一、古今獨歩と可_レ申_ト奉_レ存候。要_レ之篇と句と、至誠之所_レ溢、使_ニ人感奮興起_一ものと存候。當時小生も文部省の爲す所を憤慨せし一人に御座候處、遂に事を共にする機を逸し、遺憾の至に奉_レ存候。服部悔庵次韻のものは、當時悔庵の宅にて一讀仕候。その時瑤吟は遂に拜覽せず、今日始めて拜讀の榮を得て、難_レ有_レ奉_レ存候。當地に勤王の詩文を集めて讀むを好む

もの有_レ之、その者に貸與、讀ましめ可_レ申候。先は不_ニ取敢_一御禮申上度如_レ此に候。草々拜具。

三月廿九日夜

晦藏拜

遠湖内田先生

侍史

京都市下京區
西ノ京西月光
町
青木晦藏

春寒料峭之處、筆研益御佳適奉_レ賀候。却說憶南集一部惠寄被_レ下、高意感荷之至に候。不_ニ取敢_一一讀、當年御盡瘁不堪_ニ想見_一、雲晴霧散、曠日四照、御同慶奉_レ存候。御挨拶までに一書如_レ此。頓首。

三月三十日

龜太郎

遠湖學兄

梧右

仙臺市
瀧川君山

拜啓。其後大に御無沙汰申上げ、多罪此事に奉_レ存候。新刊之憶南集御惠贈を辱うし、御芳志難有奉_ニ拜受_一候。唯今落手直に一二葉拜讀仕候處、至極面白く不_レ忍_レ釋_レ手、猶緩々閱覽翫味可_レ仕、相娛罷在候。不_ニ取敢_一拜謝申上度如_レ此候。草々頓首。

静岡縣濱名郡
豊西村恒武

三月三十日

内田周平様

小栗慶次郎

二三

拜啓。春暖に相向候處、愈々御佳安奉賀候。先日は尊著憶南集一部御寄贈被下奉感謝候。捧讀三復、字々文々、奕々有神、與日月爭光者、曲學阿世の博士若くは大官連を縛し來り、頭上より冷水を注ぎ、大聲にて尊著を讀聞せ度と存候。如何のものにや。十數年來の鄙稿東亞錢史十八冊、一應脱稿仕候。不日携帶東上致度候。其節は伺候申上度候。右御禮旁勿々敬具。

三月三十日

内田周平先生

奥平昌洪

大阪市北區老
松町三丁目四

大阪辯護士會委囑の大阪辯護士史十二卷は、四ヶ年の餘力を以て昨年春脱稿仕候。

拜啓。筆硯愈御清福奉賀上候。今回は先生の忠肝義膽より涌出せし憶南集御惠贈に預り、御芳意忝なく奉感銘候。緩々拜讀仕り、忠厚惻怛の氣を養ひ申度候。

其中拜趨御禮可申上候得共、不取敢御禮迄如斯に御座候。草々頓首。

三月末日

遠湖先生

高橋喬松

東京市本郷區
駒込蓬萊町六

函丈

拜啓。春寒難去候處、筆硯益御勇健奉欣賀候。借貴著憶南集壹冊御贈與に預り、難有拜受致候。本書之御出版は、思想頽廢の今日、一大刺戟と可相成、世道人心に益あること大也、爲國家大慶に奉存候。委細拜眉萬々可貴意、先は御禮迄不取敢如此に御座候。敬具。

三月末日

内田周平様

初之助

侍史

東京市
上野公園官舎
神谷初之助

拜啓。(上畧) 借今回御編纂に係る憶南集一部御郵付被成下、數日前正に到達の處、小生他出不在の爲拜答遲怠に相過申候。兼て御上木の『國體之擁護』と相俟て、始めて先生の大義御首倡の儀委曲拜承出來、大慶至極に奉存候。世俗蕩々として勢利に阿附し、綱常を蔑如し、適歸する所を知らざるに際し、敢然國體の本義の顯明に御盡瘁の儀は、懦夫を起たしむるの概有之、高

二三

風、欽、仰、に、不、禁、候。昨日東田川郡清川村に於て清河八郎遺物展覽會並に維新史の講演會開催に付、兼て御掲載の東洋哲學雜誌を繕て對照致候處、遠藤宗義なる老人（元江州の郡長、甲斐にて廣瀬青村先生の配下に在りて先生を熟知の者に御座候）座席に在り、同雜誌借覽し度旨申候により貸付致候。安井小太郎氏講師として來場され聽講致候。青年者の士氣を鼓舞するには、維新史の講述は尤も有意義かと被_レ存候。尙時下御自玉可_レ被_レ成。先は御着報を兼ね、御禮迄申上度如_レ此に御座候。草々頓首。

山形縣松嶺町

三月三十一日

土方民撫

内田先生

侍史

拜呈。時下春陽之候、先生益々御勇健之條奉_レ敬賀_レ候。陳は今回憶南集と題する錦書御贈與被_レ下、難_レ有拜見仕候。南北正閏大義名分を確定せられたる大論文、實に北畠・義公と等しく國家の柱石と奉_レ感激_レ候。本書は永久堀家の什寶として保存可_レ仕、此段御芳志奉_レ感謝_レ候。就ては當地賀溪の梅花は、吉野山の櫻花と共に嬋妍を競ひ、東西の白眉にして、月ヶ瀬を凌駕する大梅林に有_レ之、本年は自動車の開通により、大に天下に史蹟名勝を紹介せしため、觀梅の客人

雲集せる有様にて、昨今は全く眞の盛觀に御座候。賀溪を訪はざる文人墨客は、數日の裡に御來光相成度候。

爰に大先生の御健康と錦書の御厚情を喜び、賀溪再遊を促す次第に御座候。草々拜答。

三月三十一日

青木俊之

奈良縣吉野郡
賀名生村

内田周平大先生

侍史

拜啓。（上畧）憶南集御惠投難_レ有、學校之節季とて多冗、漸昨夜通讀、當時を追憶して感慨無量なる者有_レ之候と同時に、現下の世情に想到して、轉々慄然たるを感じ申候。

應酬の諸大作皆金玉、小生等の妄評を加ふべき餘地無_レ之候へども、就中繁子様御送別の御詠、當時の御胸中を想察して感吟に堪へざる者有_レ之候。

先は乍三延引_レ御禮而已、勿々頓首。

四月一日

棚橋一郎

東京市本郷區
丸山新町一七

遠湖先生

侍曹

拜啓。今夕降雨、珍らしく來客も無之、久々にて書見の機會を得申候。時下春寒料峭の處、先生益々御健勝、先以て欣慶此事に奉存候。

○ 先日は憶南集壹冊特に御恵み被下、難有厚く御禮申上候。

謹而披見、當時の事もあり、と思ひ浮ばれ候。夫れにつけても、先生方當時御苦心の空しからざること、今更爲三邦家一欣喜雀躍の至に不堪候。この冊子は記念として永く襲藏、子孫の爲教科書として傳へ度所存に御座候。何卒御承引奉願上候。

近時思想界の事ども考慮を要すべきもの多し。偏に先生の御健康を奉念上候。

委細拜芝萬々可申述候。先は右御禮のみ如此、艸々拜具。

四月二日

宗 徳

東京市小石川
區關口台町二

六 内 田 先 生

宮川宗徳

玉机下

(牛込區長)

○ 拜啓。春色漸く相催し申候。筆研益御安適御座被遊、拵賀之至りに奉存候。却說此度高著憶南集壹部御惠贈被成下、難有頂戴仕候。誠に國體擁護につき、御奔走被遊候當時を回想仕候へ

ば、感慨無量のもの有之候。高著は長く先生の御志氣を後代に傳ふべきものなるのみならず、今の時に當りて世の青年に讀ましめば、士氣を鼓舞し、思想を補正し、世道人心に裨益する所大なるもの有之候と被存候へ共、如何せん今日の青年は、斯る好著を讀む素養と興味とを有するもの至て少きは、遺憾千萬に御座候。早速御禮可申上之答の處、四五日出張被命、昨日歸宅拜見仕候。遅引の段不惡御海恕之程奉願候。右御禮辭のみ如此御座候。時下御自玉專要に奉祈候。敬具。

四月三日

四 郎 平

石川縣七尾檜
物町
田保橋四郎平

遠 湖 老 先 生

侍史

○ 謹啓。貴家益々御多祥奉賀候。其後は意外之御無沙汰に打過ぎ、何とも恐縮の至に候。此度は貴著憶南集御送付被下、難有拜受奉讀仕候。吾丈の大義名分に重きを置かせらるは、今更我等後輩の喋々すべきに非ず、唯々服膺の外無之候。今や我邦のみならず、世界舉て教育の方針を誤り、利慾に汲々として、加之惡化思想の宣傳などとなへ、又は教育界にても社會教育などと稱して、孔孟の教を迂とし、道德一點張忠孝一本主義など、言語同斷なる嘲を以て現代に適

當せる社會主義など、實に我輩田野の匹夫をして杞人の憂を抱かしめ申候。今や此の大任は吾丈ならで他にあらんや。深く囑望の外無之候。先は恩惠御禮につき、つひ此事に及び、失敬之至に候。何卒御推察御海容被下度、吳々も奉願候。拜具。

千葉縣成東町

四月三日

田原綱三郎

湯坂

遠湖先生

玉几下

敬啓。貴著憶南集御惠贈被下拜謝致候。勿々拜讀、坐に疇昔之事を回想致候。乍略儀御禮迄申上候。頓首。

水戸市梅香

四月四日

菊池謙二郎

内田周平様

謹啓。(上略)さて此程は御編纂の憶南集一部御惠贈被成下、難有奉謝候。曩日の御盡瘁を追懐仕候。乍延引此段御禮申上度如此御座候。頓首。

京都市新烏丸

四月六日

出雲路通次郎

内田先生

侍史

拜啓。近頃甚だ御無沙汰申上候處、益々御清健奉賀候。陳者先般より度々御高著御惠贈被下、難有奉謝候。殊に憶南集中刀江賞月記の如きは、生の最も感歎する所に有之候。昨春罹災後復興に衣食仕、頃日漸く落成仕候に付、再び帳場の人と相成候。小生に對しては甘露の想有之候。俗務蝟集の爲め御禮遅延致候段、平に御容赦被下度候。

二伸。一度九州に御來遊如何に候哉、御勸申上候。山河草木大分面目を改め申候、先生の御感慨無量と存候。勿々不一。

福岡市東橋口

四月七日

倉成久米吉

内田先生

侍史

内田遠湖先生。濁世君子人也。學德高于一世。人莫不推服。頃者見寄示其著憶南集。披而誦之。傾倒之心益深。得惡詩二首。老生末學韻語。敢呈梧右。併乞大斧。

其一

大義亡兮名亦淪。秋霜烈日叫_レ彝倫。筆端殿併舌端正。誰是當年第一人。

其二

風貌溫乎德有_レ鄰。南山詩集富_二忠純_一。欽君雄健文詞秀。亦是日東推_二一人_一。

偶成

無_レ父無_レ君人道傾。無_レ臣無_レ子此時情。亂山斜日秋風暮。孤雁低迷一兩聲。

其二

當年意氣欲_レ衝_レ天。家破國亂轉惘然。心事未_レ成身既廢。老懷落寞一_二年年_一。

乍_レ序御一笑可_レ被_レ下候。

尙_二乍_レ末筆_一奧様へ吳々も宜しく御傳言奉_二願上_一候。

四月八日

内田遠湖先生梧右

半盲老夫天民生敬具

前出

春暖之時節益御安康、慶賀之至に御座候。扱高著憶南集を惠贈せられ、御厚情千萬感謝仕候。往年南北朝正閏の問題の起りたる折には、老兄が同志と群議を排して正論を主張せられ、終に南朝

を以て正統とすることに決し、其結果世道人心に裨益する所甚て大に有_レ之、只今高著を拜讀候處、字々風霜を挟み、當日御苦心の跡を見るに足り、眞に有益なる文字と存候。近來は人心頗る輕浮に流れ、實に浩歎之外無_レ之、折角爲_二斯道_一御自重奉_レ願候。

四月九日

島田 鈞 一

遠湖 仁 兄

東京市外下落
合八三六

拜啓仕候。扱此度は憶南集一部御投惠被_二成下_一、御高意忝く難_レ有拜受仕候。南北朝正閏の論紛紜してより于_レ今十有餘年、不肖當時少年なりしも、猶先生はじめ時の有識が秉正公明の至言を憶起す。今憶南集を拜するに及で、先生が奮挺大呼、名分の混淆を正し、大義の泯亡を拯ひたまふの御至情切々と感ぜられ、覺えず興起仕次第に御座候。當時の御詩歌を今特に御印行被_レ遊候も、亦定めし御深憂の在すによる事と、乍_レ恐奉_二恐察_一候。不肖熟_レ世風を觀するに、巧僞日に長じて義俗益_レ衰ふ。西學を講する者は慢見に墮し、東學を論する者は卑屈に流す。神皇の大道に徹入し、古今東西を該羅する大意氣有る者幾と希。畢竟神出でずんば世風の美隆は期すべからずと愚存仕候。先生は乍_レ恐當世唯一の眞儒、流を汲みたまふこと遠く、風を樹てたまふ深し。其文章は不肖の夙に謹誦する所、仰ぎ願はくは爲_二斯道_一愈_レ尊體を御大切に被_レ遊度、天下衰へたりと雖

も、草間時に繼往開來の後生の崛起するなきしにもあらず、先修が宿徳、豈に顯發することなくして已まんや。右不取敢御禮申上度如此御座候。敬具。

四月十日

後學 伊藤武雄拜

熊本市京町
熊本大林區署

遠湖先生

函丈

二伸。不肖本月初山林事務官として熊本大林區署に在勤被命したため、憶南集も本日東京より轉送、御禮遅延致し申譯無之候。

○

はるもたけなはのけふ此頃、益々御きげんおよろしくわたらせられ候御事と、賀し上げまゐらせ候。さて先日は憶南集御惠送下され、まことにあり難く厚く御禮申上候。早速拜讀、櫻花ほころびそめんとする折から、一入感慨深く御座候。また大東文化誌上にて范文正公の傳、ならびに梅田雲濱手札後序など拜讀仕候。久しく參上もいたしかね候こととして、親しく御教へをうけし心地もいたし申候。

なにとぞ御内室様にもおよろしく御願申上候。なほ時節柄御健康のほど祈り上げまゐらせ候。

かしこ

仙臺市元柳町
四二、皆川内

四月十一日

操

拜

内田先生

侍史下

二伸。さき頃手前主人事仙臺に轉任と相成候爲、當地へ移轉いたし候。いそぎしまゝに、御挨拶にも參上いたさず、失禮のだん御許し賜り度候。

○

拜啓。益々御健勝奉慶賀候。

陳者今回貴著憶南集御惠贈被成下、御厚志奉感謝候。

開卷第一に、去る明治四十四年南北朝正閏問題に係る序文を拜見し、當時我等も水戸に於て、遙に貴唱に共鳴せし事などに想到し、思はず今昔の感に打れ申候。夫れに就ても、近頃人心日に左傾して、皇室の前途も憂慮に勝へざれば、一日拜趨して御指教を仰ぎ度考へ居り候際に付、遠からず參上拜芝の上に御禮可申上候。先は右御受まで。草々敬具。

いばらき新聞社

水戸市南町

四月十八日

飯村丈三郎

三三

内田遠湖先生

左右侍者御中

○
 肅啓。櫻花爛漫之候に相成候處、筆硯愈御清適奉_ニ敬賀_ニ候。倍此度は貴著憶南集御惠贈被_レ下、早速拜讀、正閏論に關する御配意の事實拜承、感佩之至に奉_レ存候。猶賀名生堀氏の御紀事、詳細なる御記述、敬服仕候。右正閏論に就ては、當時小生も聊か辯駁書を作り、議會へ訴へ可_レ申と、某代議士を自宅へ招きて談話中、其際(四十四年一月初旬)水戸義公傳編纂中の佐藤男爵(進)來訪に付、右辯駁書を示し候處、同氏大に感憤、即時小生の辯駁書を持て歸京、渡邊宮相と小松原文相との間に往復論難、小生も數回佐藤氏に文書往來の結果として、四十四年の三月には教科書を改正すべしと文相が誓ひ候故、議會へ提出の事は見合くれよとの事にて、相控へ候事に致候義に御座候。而るに一ヶ月程後に至り、藤澤氏より更に議會へ提出致され、大に物議を起し、遂に公然改正と相決し候事に御座候。此度貴著により、先生にも御盡力の事拜承感佩仕候。無_レ端當時の事想起致され候間、一寸申上候也。猶佐藤氏盡力等の大意は、義公傳の跋(拙稿)へ聊か相認め置申候。先は不_ニ取敢_ニ御禮旁得_ニ貴意_ニ度、一書如此に御座候。草略不宣。

水戸市大阪町

四月廿一日

栗田 勤

遠湖内田先生

侍史



○
 拜啓。憶南集御惠贈に預り奉_ニ萬謝_ニ候。當年のことを追憶して誠に不堪_ニ感慨_ニ候。爲_ニ邦家_ニ御自重專一に奉_レ祈候。先は御禮迄草々。

四月廿一日

猪狩又藏

内田周平様

東京市外西大
久保九一

○
 謹啓仕候。晩春之節に相成候處、

松山高等學校
長

先生には益御機嫌克被_レ爲_レ在候段、爲_ニ斯道_ニ奉_レ賀候。陳は只今憶南集二冊賜り難_レ有奉_レ存候。一冊は仰に従ひ、由比校長に示し置候。共に南北朝正閏問題のむかしを物語り申候。謹みて御禮申上候。謹言。

松山市北京町
大江文城

四月廿一日

文城再拜

遠湖先生

翠華巡狩入_ニ南山_ニ。其奈當年天步艱。今日延元陵下客。空看陵上暮雲還。大江文城拜草

拜啓。憶南集御惠與、厚く御禮申上候。緩々拜讀可仕、且兒女等にも讀誦せしむべく候。物質文明の弊は、國民の尊皇心に動搖を來たし、近くは彼の周南の勤王家より、皇儲に對し不敬を極めし狂兒を出したるが如き痛恨の事も有之、此際高著の如きは、國民をして大義を明かにし、名分を正しくし、迷ふ所なからしむるに於て、大に裨益する所あるものと存候。
乍末毫臆様に可然御鶴聲奉願候。早々。

東京市外大崎町八〇四

四月廿二日

板倉松太郎

内田 大人

侍史

拜呈。時下益御清適奉大賀候。陳者憶南集御惠投奉感謝候。當年之御苦心奉察候。御禮迄、早々不一。

東京市小石川區原町三一

四月二十二日

平山成信

内田 周平様

岡山師範學校

(上略) さてこの程は、豫て邦家のため御盡瘁遊され候正閏論に關する玉詠貴稿など、御編纂なされ候憶南集、御惠贈賜はり候御情のほど難有奉存候。誠につきつくと拜讀仕候ては、かの當時御周旋遊され候事ども想ひ出でられて、感慨にたへざるもの有之候。殊に學校にも御寄贈下され候事とて、各年級の授業には夫々御志のほども申聞け居り候。二三日前校長出張中の故を以て、思ひながら御禮延引仕候、宜しく申出られ候。返すくも御厚志忝く拜し奉候。(下略)

岡山市門田五

四月廿二日

笠原節二頓首

内田 遠湖先醒

貴座下

長野縣飯山中學校

拜啓。益々御健在の御事と存じます。御贈與下さいました先生の憶南集、確かに落掌致しました。若輩の爲に特に御贈與下さいました御心、有難さに堪えません。謹んで御受け致します。時節柄御尊體特に御安養を祈ります。

四月廿五日

屋敷頼雄

内田 周平先生

拜啓。新緑之好時節、益御壯榮被爲在候段、慶賀之至に奉存候。然者過日は御新纂之憶南集御
惠贈を蒙り、洵に難有奉存候。先生平常之御高志は、夙に承知仕居候へ共、斯の御心を以て、
親ら芳山に南朝の遺跡を御訪ひ被遊候御事により、徐々往年の南北正閏論當時に於ける御意氣の
壯なりしを追憶仕候。此御書收めらるる所のもの、雄篇大作とは不可申も、誦讀諷詠の間、不
知不識正義を感じ、名分氣節の念を養ふことの、轉切なるを覽え申候。被爲懸貴意御眷
顧の御深情、只管御禮申上候。早速御受之御挨拶も可申上候處、其當時郷里に罷越不在の
爲、延引仕候段申譯無之、御詫申上候。先は取急ぎ御禮迄申上度如此御座候。勿々拜具。

四月念五

神崎 一作

東京市外千駄
ヶ谷町六五五

内 田 先生

侍史

謹啓仕候。益々御清穆奉賀上候。其後は無申譯御無沙汰に打過申候段、御海容被下度候。陳
ば貴著憶南集御送附を辱うし、正に接手拜讀致候。往年銀杏城下に於て先生の御薫陶を蒙りし時
代と、明治四十四年國體擁護團御設立當時を追憶し、感慨に不堪候。貴著は永く學校に保存し、
生徒訓育の資に供し度、圖書課に廻付致置候。不取敢以書中御禮申上候。時節柄御加養專一

に祈上候。草々敬具。

四月廿六日

隆

二

姫路高等學校
校長
小松原隆二

内 田 先生

玉案下

拜呈。其後は非常に御疎音に打過缺禮之段、眞平御高恕奉願候。次に小子事又々閑人生活より
乏を本校經營之任に承け申候事に相成候に就ては、向後とも宜敷御指導奉仰候。却説今回は憶
南集御惠贈を辱ふし、當年正閏を明かにし給ひし綱常維持之御忠誠を想望仕候を得、實に無限の
感懐に打たれ申候。特に藤澤氏は當縣の緣故者に有之候趣にて、一層御惠贈之意義深きを覺へ
申候。拜讀後は本校圖書館に藏め、學校の青衫をして御盡忠之來由を悉さしめ、併せて大義名分
之歸趣を辨へしめ度愚衷に御座候。敬具。

四月二十六日

繁

吉

高松商業學校
校長
隈本繁吉

内 田 先生

函丈

謹啓。

先生には御變りは御座いませんか、御伺ひいたします。私は無事で毎日軍務に勵んでゐます。今度は憶南集を御送り下さいまして有難く御座いました。大變嬉しく拜見致してゐますが、日中の演習に身體の疲勞甚しく、讀書や考察の出来ないことを遺憾に思つてゐます。然し時間の許す範圍に勉強したいと思つてゐます。頓首百拜。

四月廿八日

春山 禪城

石川縣金澤市
歩兵第七聯隊
第二中隊第六
班一年志願兵

内田 周平 様

函丈

謹啓。時下新緑の候、先生いよ／＼御壯健に渡らせ候段奉大賀候。

さて過般わざ／＼御惠投を忝ふ致し候憶南集一部、本日正に拜受仕、今更ながら拙詠の爲に紙面の御割愛を賜はり、光榮身に餘る次第と奉感謝候。取敢へず深く御禮申述べ候。

尙ほ本日拜受致し候理由に就ては、一言御断り申上置き候。小生は先年來京都府皇典講究分所教育部主事兼務致し候處、本年四月よりは京都國學院と改稱致し、事業の擴張を斷行し、神職と教員との養成に着手致し候。従つて教科書肆より教科書見本の寄贈多數有之候ため、係り

の者學校へ配達せられたる寄贈教科書と心得、自宅へ持歸り居候次第に候。其後御ハガキ頂き候より、早速それ／＼調査致し、漸く本日右の次第判明致し、拜受仕り候様の次第、誠に恐縮の至りに存じ候。右あしからず御諒恕下され度願上候。

一讀當時を回想致し、感慨無量禁じ能はざると共に、玉石の同架を許されたる先生の御寛仁、唯々感銘の外なく、喜悅の至に存じ候。草々頓首。

四月三十日

伏木 誠義

内田 遠湖 先生

座下

京都市上京區
一條通烏丸西
入京都國學院

拜啓。先以愈御清穆被爲在奉恭賀候。平素御機嫌奉伺之禮を缺き居、誠に恐縮之至奉存候。不三相變御健勝に被爲在候事を承り、衷心欣賀罷在候。然者貴著憶南集御惠投を辱うし、直に拜讀、久し振に御高教に接するやうの心地仕、當年御講筵に侍したる光景を追想し、無量の感に堪へ不申候。高論に従ひ弊校圖書館に藏置し、長へに青年感奮の資料たらしめ可申、謹んで御禮申上候。同學飯田御世吉郎君暫く閑散の地に在り候處、今般弊校漢文の教官として俱に育英の業に當り居候に付、直に同君にも貴著を示し、共に先生の御健在を祝し申候。謹で御禮をかね平

素の御無音を謝し奉り候。頓首再拜。

廣島高等學校

五月二日

十時 彌

内田 先生

侍曹

副伸。小生儀過日來出張中にて御返事遅延仕候段、併せて御詫申上候。又拜。

篁溪(佐伯)詞伯寄贈内田遠湖所著憶南集。賦此言謝。

五月二日

安達 常正

宇都宮市西原
町二五〇八

正閏論來排俗儒。憶南一集仰皇謨。義公首唱子成繼。掉尾美歸田遠湖。

時下御多勝奉賀候。此度憶南集御送示被下、欣喜悅、敬みて繕讀仕候。適に指南・北征二錄と共に日月と光を争ふもの、吾心の所嗜樹象の口に於けるに優り、昨晚着郵、即夜一過讀、誠に今朝平旦之氣清く、即ち別雷山氣、賀茂水聲なり。乍略儀一筆御禮申上候。

五月念三日

神樂江 熏再拜

京都賀茂御園

遠湖 備宗

侍者

拜啓。冲澹之時節、先生益御健勝被爲涉、欣賀此事に奉存候。陳は先頃憶南集御刊行之事、新報にて承知仕候處、折柄川田雪山氏會晤候事有之、同氏に願ひ先生より一部割愛懇願の次第、幸に御聞届被下、本日正に拜手仕候。是より日夕誦讀可仕と相樂み居候。實は參館御禮可申述之處、明日より家族を携へ伊勢參宮の途に上り申候に付、何れ來月歸京の上、改めて御伺可申、先は乍略儀一書中御禮迄如此に候。敬具。

五月念五夕

荒浪 坦

東京市麴町區
元園町二ノ五
荒浪市平

内田 先生

梧下

拜呈。高著憶南集御惠送被下奉感謝候。早速拜讀、感慨無量に御座候。茲に謹而右御厚禮申上候。草々頓首。

五月廿七日

植木直一郎

東京市赤坂區
青山北町六ノ
五〇

内田 先生

座下

四四

謹啓。新緑の候、益々御清祥の段奉賀上候。却説御高著憶南集は、南朝正統説を力説せられ、大義名分の上より、また歴史の資料として、此の上もなき好著述の由拜聞仕候。甚だ恐縮の至りに候へ共、本校生徒教養の活資料として、壹部御頒布相願はれまじく候哉。甚だ失禮ながら寸楮を以て及懇願候也。敬具。

和歌山縣立伊都中學校長

五月二十七日

宮澤 虎雄

内 田 周 平 殿

玉机下

謹啓。有益なる書籍憶南集、早速御寄贈被下誠に難有、生徒教養上裨益するところ多大なるものと深く感銘仕候。右謹而御禮申述度如斯に御座候。敬具。

和歌山縣立伊都中學校長

六月一日

宮澤 虎雄

内 田 周 平 殿

玉机下

謹白。(上略)昨日は御著憶南集御惠賜り、再拜感戴、早速拜誦仕候。今更ながら在學當時の御話を思ひ浮べ、御尊貌を拜するが如く感じ申し候。長く記念として御厚恩を拜謝し、愚生座右に備へ置き申候。(中略)先づは亂筆ながら御禮迄如斯御座候。草々再拜。

五月三十一日

谷 田 左 一

福井縣足羽町
六條村下六條
田中方

内 田 先 生

函丈

敬啓。時下薄暑之候、道兄愈々御清穆爲邦家奉欣賀候。陳者貴著憶南集壹冊御惠贈被成下、難有拜受奉謝候。彼の南北正閏論争當時、不肖其末班に列し、南朝正統を提げ、多少活動仕候間、猶更道兄憂國の大文章を謹讀し、感激に不堪候。不取敢右御禮迄敬具。

五月三十一日

弘 之

東京市小石川
區小日向臺町
一ノ六三
田中弘之

内 田 周 平 老 先 生

四五

案下

二伸。明治維新當時神儒佛三道を無視して、一に物質文化を基調とし、文教に政治に諸業を遂行し來りし結果、内には思想の悪化に苦しみ、外には特に米國の排日大侮辱を招き、有史以來の國難來り、眞に痛憤の極みに御座候。御高見如何、不日參邸拜承仕度と存候。

○
拜啓仕候。(上略) 借今回は憶南集御惠贈被下、變らせ給はぬ御恩情、只々感泣の外無之候。拜讀致し、在學中の追憶、轉々感慨無量に御座候。小子職を 後村上院様崩御之地に奉じ、皇運之雄圖を祈願遊されたる 大神に日夜奉仕し、聖跡を不朽に傳へ度焦慮致居候折柄、一入感慨を深く致候。先生何卒爲三邦家御自愛之程奉三祈上候。

先は御禮申上度如_レ此に御座候。敬具。

六月十一日

吉 福

官幣大社住吉
神社社務所
福宜澁谷吉福

遠湖内田先生

恩師貴下

○
拜啓。時下梅雨之候、益御清安可_レ爲_レ在奉三恭賀候。扱過般は尊著憶南集一部圖書館へ御惠贈被

下、御厚志感銘之至に御座候。正統問題に關しては、先生之御精神楮表に溢れ、乍今更敬服不_レ當次第に御座候。早速御禮可_レ申上_二筈に候處、今春久しく大阪方面に旅行仕り、四月中旬歸高後、老母大病、看護等の爲、諸事等閑に流れ居、乍存欠禮に相成候段、何卒御海容賜り度願上候。先は右御詫旁拜受御報申上度如_レ此御座候。拜具。

七月初三

中 城 生

高知市江ノ口
東小川
中城直正

内 田 先生

侍史

○
(前略) 先年南北朝の正閏論囂々たる際、先生は南朝正統論の首將として奮闘せられ、遂にその目的を達せられ候こと、痛快に御座候。爲めに南朝幾多の忠臣義士も安眠し、光りは萬世に赫々たるものあらんとするは、喜ばしき至りに御座候。偶吟一首御笑覽に入れ申候。
それとたにわかぬ黒雲消えうせて

吉野は元の花にひかれり

九月廿一日

佐藤 隣 幸

福岡縣田川中
學校

内 田 先生

〔是より以下は昭和三年二月憶南集第三版に對するものとす〕

春寒料峭之候、筆硯益御清勝之條奉_レ敬賀_ニ候。(中略) 扱今朝は思掛なく憶南集御惠贈に預り、難_レ有深く御禮申上候。尊著は既に再三拜讀、國體之尊嚴を保持せられたる先生の御高志、佩服之至に不堪_レ候。尊著は永久記念として子孫に傳へ可_レ申候。

再伸。先生の文集御上梓之折は、一部御讓與被_レ成下_ニ候様、今より御願申上置候。

二月盡(昭和三年、以下同_レ此)

横 田 生

遠 湖 先 生

侍史

小石川區大塚
仲町四一
横田眞齋

謹啓。今回貴編憶南集一部御惠贈下されまして、誠に感佩の至りに存じます、篤と拜讀仕りまして、啓蒙されたいと存じて居ります。

未だ拜眉の榮を得ませぬが、御令名は兼ねて承つて居ります。只管國を憂へ道を樂まれまする御高風、誠にお慕はしふ存じ上げます。私共に一人にても此様な先輩を有する事を何より心強く存じます。不_レ取敢_ニ御禮御挨拶迄不宣。

二月廿九日

犬飼修三郎

内田周平先生

東京府下和田
堀町四四九
日本濟美學校
教員

謹啓。

未だ拜眉の榮を得ませぬ私共に御貴墨を賜はりまして、誠に有り難う存じ上げます。

殊に後輩獎勵の思召で、拙文に就いて御示教を蒙りまして、實に感佩の至りに存じ上げます。

御寄贈を戴きました憶南集一編は、千載の知己の如く熟讀拜誦致して居ります。誠に章々句々私共の心臓の高鳴りを覺ゆる所の金玉の文字であります。私共は不學でありまして、章句の文とか餘韻とか申すことは、少しも解りませぬ方ではありますが、南山の御事共は申すも畏し、水戸義公の御一文、殊に有り難く拜見仕りました。それから南北正閏の御高見、私共が彼是申上げるまでもありませぬ。尙桂内閣當時の教科書事件の事、一向詳細を存ぜずして居りましたが、貴編によりまして始めて真相を伺ひました。洵に邦家に對する御盡忠の御心組み、寧ろ感佩の外は御座いませぬ。不肖の私共では御座いますが、先輩諸先覺の意氣に感じまして、益々眞面目に奉公の微衷を致します事で御座いませう。私共は今日に於ても遺憾ながら尙且つ「尊氏根性」なるものが殘存致して居りまして、動もすれば義公によつて中興されました楠公精神が壓迫されて居る事を、

非常に残念に存じて居る次第であります。どうぞ今後ともお見捨てなく御眷顧の程を、單へにお願ひ致しまして御挨拶に代へる次第で御座います。何卒邦家の爲め切に御自愛の程を祈り上げます。

三月二日夕

犬飼修三郎敬白

内田 遠湖先生

侍史

風光日佳、尊體益御清安奉大賀候。其後は存外御無音に打過、何卒御海容奉願候。扱此度は御高著憶南集御惠贈に預り、難有千萬奉鳴謝候。早速拜讀仕り、嗟嘆久之。正閏論の起るに當り、先生卓然大義名分を明かにし、當途者をして其の非を改悔せしめたる一事は、誠に千古之快事、先生の名も亦不朽に垂ること、吾輩讀書人の欲羨に堪へざる所に御座候。集序尤も佳妙、誰謂鋒銜太露歟、鄙意私以爲大不然、未知尊意如何。(中略) いづれ上京之際は是非とも拜趨、御高諭を仰ぎ度存候。先は御禮かた／＼如斯に御座候。草々不一。

三月一日

吉野盛再拜

内田 先生

千葉縣夷隅郡
上野村名木

侍史

謹啓。逐日暖氣に相向ひ候折から、先生愈御清穆之條奉慶賀候。此度は御心に懸けられ憶南集一部御惠贈被成下、忝拜謝し奉り候。迂生も往年吉野に參り如意輪寺に一泊仕候事有之、何かと追懐の情に堪へず候。不取敢右御受旁御禮迄如此御座候。

三月初二

山口察常拜

遠湖 老學師

侍史

謹啓。

春寒難去候處、先生彌御清勝之段、邦家の爲め欣賀之至に存候。迂生も碌々過光候間、幸に御放念可被下候。

憶南集御惠投、誠に有難き仕合に存候。拜讀再三、深く先生當時の御心事を悲み申上候。願ふに當時文部省其人無之、編輯の博士舜倫に暗く、詭辯邪説が如何に世の大患となるを察せず、漫に正邪を紊り薰蕕を混じて、以て清潔無垢の第二國民の思想を敗壞し了らんとしたり。危機一髪、

言語道斷とは、斯る場合の語ならんか。若し當時先生の慨然蹶起、以て妖魔の雲霧を掃ふにあらざりせば、今日我國の思想果して如何ならんか。然れども曲學阿世の徒輩今猶多く、將來の事寒心に堪へざるものあり。想ふに先生近時の世態に感慨せらるゝこと、必ず當年の御心事に譲らざるものあらんかと存上候。何卒邦家の爲め御加餐自愛を祈り上候。其中參堂壽眉を拜し御禮申上度候へ共、不_レ取敢_二寸楮を以て如_レ斯に御座候。謹言。

三月四日

深井虎藏

東京府下杉並町高圓寺四六

内田先生

御梧下

○

拜啓。春寒料峭之處、益御清勝の段欣賀此事に奉_レ存候。擬今回憶南集御惠送賜はり、御芳情不_レ堪_二感激_一奉_二拜謝_一候。

早速一氣に拜讀し畢り申候。

小生は吉野・赤阪・千早・觀心寺へは二度參り、賀名生と天野山と金剛山へは一度行き、花に泣き木枯の風に咽び申候一人に御座候。「國體之擁護」も友人肅堂より贈られ、乍_レ蔭尊臺方御同人の報國の大義に感泣したる者に御座候。

静岡縣小笠郡

三月五日

山崎常磐

西南郷村

内田遠湖先生

侍史

○

謹呈。殊_レ空際しく候處、各御清々奉_レ應賀候。陳者御高著憶南集御惠投被_二成下_一、芳志難_レ有拜受仕候。當時南北正閏の論囂々たるの時に當りて、先生御一門の方々慨然蹶起、日夜御奔走、萬難を排して大義名分を御唱道被_レ遊、遂に至誠天に通じ、妖雲天地を拂ひ、再び赫日天に中し、金甌無缺の國體其の尊嚴を保つを得候事、國家之大慶之に不_レ過と奉_レ存、感銘の至りに不_レ堪次第に御座候。御惠に預り御書は、家寶として子孫に相傳へ可_レ申候。不_レ取敢_二御禮申上度如_レ斯御座候。

三月六日

新井竹太郎

東京市小石川區第六天町一七

遠湖内田先生

大人侍史

時下春暖相催候處、益々御健勝御座被爲在、目出度奉存上候。扱此度は憶南集御惠贈被下、千萬難有頂戴仕候。正間問題については不一方御盡力被遊、國民一同感謝仕候次第に御座候。卷末賀名生堀氏の記事拜見仕り、非常に興味を覚え申候。肅堂先生に餞せられたる長篇、實は愚息秋山謙藏近時同先生の許に出入致居候趣申居候、眞に奇妙の感有之候。就ては愚息事伺はせ申度存居候。其際は宜敷御指導被下候様願上置候。(中略)右御禮旁御挨拶申上候。時候御用心被遊候様奉祈上候。頓首。

備後西城町

三月七日

秋山 定一

内田 老先生

臺下

謹啓。春暖之候、益御清安に被爲渡奉恭賀候。(中略)此度は御高作憶南集御惠贈に預り、國體擁護之大文字、沐浴拜讀之上、御高教奉仰度存候。何れ拜趨御禮可申上候へども、不取敢以書中一應御受御禮申上度如此御座候。敬具。

東京市牛込區
戸山町二

三月十日

馬場丈太郎

遠湖先生

侍史

春暖相催候折柄、愈々御文安奉賀候。此程は憶南集一部御惠與被下、難有御受申上候。爾來殆ど手卷を放たず熟讀罷在候。南北正間に付先生等曾て率先義を倡へられ候を、今更ながら感謝之念禁する能はず候。茲に寸楮厚く御禮申述候。頓首。

三月念一

石井 碩

東京府下青山
原宿一〇五

内田 遠湖先生

座前

謹んで恩師内田先生に申し上げます。

餘寒已に去つて櫻花爛漫、春も闌となりました。先生始め御一家様方には愈々御健康の由、大慶至極に存じます。扱過日は先生御作の名詩を御送附に預り、尙御禮も申上げませずに居りましたのに、又々重ねて世にも得難き御本を御惠與下さいまして、何と御禮申してよいやら謝辭にまよ

ふ次第であります。只々有難く再讀精讀拜誦して、他日を期して御高恩の萬分の一に報いんと致してをります。早速參上とくと御禮申上げべき處、取敢へず乍失禮一寸紙を以て厚く御禮申上げます。御本を拜誦して思ひ當ることがございます。曾て愚生が未だ小學校に學びし頃、國史教科書に南北朝の對立してその正閏順逆の明かでなく、子供心に後醍醐帝に御同情申し、當時の賊徒を憤慨してゐましたのに、數年ならずして國史の訂正せられて、北朝を言はず、胸の空いた様な感じを持ちましたが、その改訂に及びし所以の先生にありしを知らなかつたのであります。昨年東洋大學に入學し、我が學界にかくれなき先生の孟子御講義を親しくお聞きするに及び、いよ／＼深き御研究と、熱烈なる氣概と、偉大なる御人格とを敬慕して止まず。むべなる哉過去南北正閏論は、この我が師内田先生の御精忠のほとばしりによつて、明かにせられたのであります。我が師の誇りは我が誇り、御本の始終を熟讀翫味して、やがての休暇には郷里の學校に一大誇の大氣焰を擧げんと喜び拜誦して居ります。詩なるものはことにその意の深いものと聞いて居ます。淺學な愚生等のよくその眞を知る能はずと考へますから、御迷惑でありませうが、先生のお暇の折を承つて、不審の點をお聞きいたしたいと思つてゐます。お恥しい次第ですが、私の過去は實に貧弱な田園生活でありました故に、實にあはれな淺學であります。先生私の過去は誤つた道をたどつて居りました、今誠の道の出發點に立つたのです。私は大なる責任があります。

尙數年を老父母の血と肉とによりて養はれ、この悪い頭を以て社會を導かねばなりません。しかも年のみ徒らにとりて入日は近く道遠し。希くは我が内田先生、愚生の爲めに陰に陽に御鞭撻御指導下さいまして善良なる中等教員、否社會の大救主となる様、御教導下さいませ。様お願ひ申し上げます。

御禮かた／＼くれ／＼も將來の御指導を御依頼申し上げます。末筆乍ら先生御一家様方の御多祥をお祈り申し上げます。草々頓首。

四月十一日

成田實太郎

内 田 先 生

東洋大學倫理
學東洋文學科
學生

拜啓。過日は久瀾得三拜眉、御高話に接し、本懐至極に御座候。憶南集御送寄に預り、早速拜讀。貴下御一家御一門、正閏論の爲め一方ならざる御盡力あらせられ候願末、薄々は拜承仕居候處へ、詳細之事實承知、西山公も泉下に御満足之事と感佩仕候。何れ不日拜趨御禮可申上候得共、不取敢一寸簡微意申上候。草々不一。

六月十八日

知 泉

遠 湖 先 生

東京市芝區白
金今里町八九
朝比奈知泉

拜啓。御尊翰並に御惠贈の憶南集一部正に拜受仕候。拙稿御推奨に預り恐縮に候。貴臺の如き國士とも申すべき方の御同心を得たることは、小生の尤も欣幸とする所に御座候。憶南集拜閱一過仕候。事と人と相應じて、誠に讀む者をして感激措く能はざらしむるもの有之候。三十年前文部省の漢文廢止案に反對せし時、日夕貴臺と往來いたし候が、その當時より、小生は貴臺の御誠懇に敬服いたし居り、今日に至りても渝る所無之候。名を賣り學を街ふ者多きに不堪時代に、貴臺の如き誠懇の士の存在は、確に人意を強くするものと信じ候。何卒御加餐御自愛あらんことを切望いたし候。右挨拶まで頓首。

九月二十八日

桑原 隲藏

内田 周平様

玉案下

京都市上京區
塔段敷下町
京都帝國大學
教授

讀内田翁著憶南集有感

若狹 竹内 昇

芳山何處鎖春霞。往事追回轉咨嗟。偶閱憶南書一卷。詞花却是勝櫻花。

上遠湖内田先生書(明治四十四年)

佐伯 仲藏

十二月十日。佐伯仲藏謹再拜。白遠湖内田先生座下。仲藏少小好學問文章。妄以古人自期。而資質魯鈍。業不加進。且急於養親。弱冠就仕途。爾來二十餘年。心期齟齬。碌碌無成。今則一小俗吏耳。然講學修文之念。猶存於胸臆。嘗求學問醇正。文章精美之士。欲從以受教。而未得焉。常以爲憾。近者讀大江敬香所刊行風雅報。因得窺宿儒名家學問文章之一斑。竊以爲先生學兼東西。識通古今。尤用力於經術。篤信洛閩。毅然以中流砥柱自任。仲藏以此知先生之學精醇至正。與夫中無所守。唯阿世媚俗之務者。懸絕也。先生之文。莊重典雅。法度謹嚴。情理兼臻。悠揚不迫。歐公所謂精金美玉者。實於先生之文見之矣。仲藏久求而未得者。今輒得之。喜不可言。於是欽慕景仰之情。油然而生。以謂嚮之所以爲憾者。庶幾至今得償之。苟欲講學修文。則舍先生其將誰從。乃所以前日介中澤子明。請謁於門。

墻也。不啻是已。更有深感者焉。今春南北朝正閏論之起也。議論紛紛。未有所決。先生乃慨然蹶起。首倡大義名分。一枝之筆。三寸之舌。痛擊國定教科書之失體。侃侃諤諤。無所畏避。而與一門同志。設立國體擁護團。飛檄四方。振起輿論。日夜奔走。殆廢寢食者數旬。天日未墜。聖諭一下。當路大臣。恐懼悔非。倉皇改訂教科書。於是正閏之辨。順逆之別。始決。國體得保其尊嚴矣。此固雖由祖宗之威靈與皇上之聖斷。仲藏竊以爲先生等數人。率先倡義者。尤與有力焉。在昔楠氏闔族。以流離顛沛之餘。衛護正統天子於南山半壁之地。以靖獻先王。今者先生以草莽一儒生。與一門同志。主張南朝正統論。以擁護國體。其迹雖異。至其所以效忠於國家者。則未始不同也。方今都下學者。指不暇屈。大率平居弄筆舌。以阿世媚俗。而當此際。屏息重踵。袖手傍觀。不敢發一語。嗚呼。此輩平生所讀果何書。所講果何道。何其無氣節之甚也。聞先生崇奉崎門學。崎門之學。

以重國體尙氣節爲主。宜矣。國家有事之日。氣節稜稜。發揮其蘊蓄。以維持綱常民彝也。若先生者。豈可不謂眞儒耶。此仲藏之尤所以欽慕景仰不措也。抑仲藏年既過不惑。今而欲以公退之餘。講學修文。不能無日暮途遠之恨。然幸獲從眞儒若先生者。而聞道於門下。則夕死可也。伏願先生無以魯鈍見棄。無以俗吏見斥。憐其志。察其情。而有所教焉。懇款無已。

附 録

○南北朝正閏問題の回顧

内 田 周 平

(昭和十二年六月、大阪府思想問題研究会に於て談話)

明治四十四年に私が實歴した事を述べます。四十四年一月に南北兩朝正閏の議論が起りました。其の前年に幸徳傳次郎等の大逆事件があり、その處刑が一月に行はれました。其の五六年前より、國定教科書の小學歴史に於て、南北朝の書き方が、北朝を最眞して居るやうであつた。それが四十四年に及んでは、官軍賊軍の名稱を廢して、楠・新田は官軍でなく、足利高氏も賊軍でないといふ事になり、既に印刷に着手して、四月よりそれによつて教へようといふ事になつてゐた。これが大きな誤りである。其の頃大逆事件に與した一人が糺問せられた時、〇〇〇〇は北朝の後だから〇〇しても構はないと、出鱈目を言つた。彼等は元來大義名分を知る筈がない。然しながら此等の點にも配慮せられたのか、喜田貞吉等は東京附近に出張して、南北兩朝の間に正閏輕重の區別を立てるなど講演しました。此れは官命を受けて教科書を發行する準備運動のやうにありました。而してその小學歴史には、従前と違ひ、御歴代の代數や、南北兩朝の年號を書いた

ものが其の附録になつて居らぬ。南朝を正とすれば、明治天皇は百二十二代目に當られ、北朝に依れば百二十三代目に當らせたまふ。當時日露戦役の戦勝後で、世界の人々が日本の隆運を羨んでゐた時、明治天皇は神武天皇より何代目でありませうかと米國から尋ねられ、宮内省の役人は、調査中である、少し待つてくれと答へたといふ話を聞いて居ります。それは北朝を正統にしようかといふ下心があつたからである。文部省も次第に北朝に傾いて、四十四年の改訂本には、教師用書に『兩朝の間正閏輕重を論すべきに非らず』とある。これが大きな間違である。其の本書の中には『尊氏錦旗を押し立て、京畿に迫らんとす』と記してある。北朝の天子の旗を立てたのであらうが、是ではどちらが官軍かわからない。そんな本が發行される事を知つたのは四十三年の十二月で、小石川の或る小學校教員が文部省に抗議を申込んだが却下されました。いよ／＼その本を發行せんとする事が新聞紙上で評論された。

丁度其の時議會が開けてゐて、早稻田大學の教授牧野謙次郎・松平康國の二氏は、(俱に私の學友)これぞ順逆を誤らしむる大問題なりとし、之を正さねばならぬと憤慨せられた。同じ早稻田大學の吉田東伍(歴史學者)・浮田和民(哲學者)・久米邦武(漢學兼歴史學者)の人々と議論が合はなかつた。此等の人々は、つまり北朝正統論者であつた。文部省では國史の専門家三上參次・喜田貞吉の二氏を編輯委員とし、文部大臣は小松原英太郎・總理大臣は桂侯爵であつた。牧野・

松平の二氏は、文部大臣に會つて論難しようとしたが、會はれないので、牧野氏はその従弟藤澤元造氏(代議士であつた)に謀り、議會に於て教科書に就いて質問する事にし、二月の初め議場に於て文部大臣を攻撃彈劾することにしました。其の時牧野氏から私の所へ手紙を寄せて來ました。即ち今回の南北兩朝を同等にした事に就いて、どう思ふかとあつた。私は直ぐに「漢賊兩立セズ、當ニ擊ツテ却クベキナリ」と返答を出した。そこで議會での質問書の中に、「三種ノ神器ハ皇統ニ關係ナキカ、楠公ハ忠臣ニ非ザルカ、」の如き質問六七個條あつたが、小松原文相・桂首相が答辯せねばならぬ。之を聞いた時、桂首相は小松原文相に對して泣いたといふことである。他の問題ならばまだしも、皇室に關した問題で失敗すれば再び起つことは出來ないから、揉消すより外に仕方がないと云ふ事になつた。

藤澤元造氏の父南岳翁は儒者であつて、初めは元造氏と同じ意見を持つて居つた。氏はいよいよ議會で二大臣を彈劾せんとしたが、これは皇室に關する問題だから、伊勢の大神宮へ參拜せねばならぬと、參拜して大阪へ歸つて見ると、南岳翁は前と説が變つてゐて、穩かにせよ、まるくをさまるやうにせよと言はれたので、藤澤氏も大分軟化したのである。これは曾て南岳翁に師事した下岡忠治が、桂首相の秘書官のやうな地位であつたので南岳翁に説いて、どうか事を穩かにせられたいと懇請したのであつた。こんなわけで、藤澤氏の剛骨も軟かになつた。それから上

京の途次、名古屋を経て、こゝで又或る軍人から言はれて軟化した。衆議院の質問は二月十六日であるので、其の前日に藤澤氏は東京に入り、新橋に着いて見れば、桂首相より立派な馬車で迎へが来てゐる。不思議に思ひながらも、その馬車で桂首相に招かれ、大へん丁寧に取扱はれ、藤澤氏の氣持が大に變つた。そこで首相よりゆつくり休息するやうにとの事で、酒を出された。その際藤澤氏は質問の材料を風呂敷包にして持つて居りながら、好きな酒に酔ひ、その書類を取上げられた。その上お金を一封もらつた。藤澤氏は松平康國氏の家が静かなので、こゝで休息することになつてゐたが、そんな事情でやつて來ない。松平氏はやうやく料理屋にて藤澤氏を探し出したが、氣持がすっかり變つて居る。そして質問書の事には少しも言及せぬ。美酒佳肴で誘惑されたのである。初めの約束が履行出來ないので、ニセキチガヒ佯狂となつた。私は其の前日牧野氏の家で、藤澤氏に加勢をする積りであつたが、それも出來ないで、同志三四人寄つて善後策を相談した。藤澤氏は翌日衆議院で演説したが、小學歴史教科書の事に就いては何も言はず。終に代議士を辭職しました。全く意氣地なしのために、かやうになりました。

そこで吾々は益々やうと云うので、私は兄を郷里より呼びました。兄は内田正といひます。兄は其の長男旭を連れて上京しました。是の時犬養毅氏は、衆議院に於て、幸徳の大逆事件と、此の教科書問題とを併せて質問すべく吾々と氣脈を通じて居つた。然し相手は相當の人ばかりだ

から、これと論争するは容易の事でないが、吾々の方にも、哲學者の姉崎正治氏があつて、一番早く新聞に其の主張を述べてゐた。又副島義一氏は國法學の立場より、黑板勝美氏は國史學の方面より、いづれも議論をした。犬養氏が桂首相を糺弾する時、その面前に向つて、明治天皇の勅に依つて書かれた大政紀要を突きつけた。私は又同志の者と相謀つて徳川達孝伯に請ひ、貴族院に於て教科書の訂正に就いて詰問してもらつた。此の間に於て、牧野・松平兩氏は、この運動の表面に立たず蔭に居りましたが、潜かに意見書を在小田原の山縣公に送つて公の裁決を懇請しました。私共は是れより先に、大日本國體擁護團をつくり、教科書排斥の檄文を全國新聞社等に配送しました。その數五六百通でありました。これによつて東京は勿論地方も次第に此の事に關して議論が起つて來ました。大阪・石川・福岡・仙臺・小樽等は皆南朝正統に味方しました。東京では黒岩涙香の主宰した萬朝報及び讀賣新聞が南朝正統を説きましたが、あとは日和見であつた。私は此の際國民大衆に訴へる爲に、三度演壇に立ちました。又奈良縣會議員岩本平藏氏と、水戸中學校長菊池謙二郎氏とに書を送つて出京を促しました。其の意は北朝が正統になれば吉野神宮の尊嚴は全滅する。南北に正閏を立てねば、大日本史の功績は丸潰れである。其の地方の有志は、速に出京して奮闘せよといふのであります。神田青年會館での講演には、『國民教育の大混亂』と題して、一時間半許り演べましたが、聽衆は會場に一杯になり、警官は講演の要點を筆記

してゐます。さうして二三の警官は佩劍鏘々と會場をぐる／＼廻つてゐます。私は聲氣激熱して知らず識らず卓上をたゞき、コップの水がこぼれて、その水が警官に振りかかりました。さうして最後に後醍醐天皇の御遺詔を捧讀いたしますと、満場總起立で敬意を表し賛成してくれました。私はこれ以上愉快な事はありませんでした。當時私共の國民に與へた檄文は、左の通りであります。

大義名分は、國家の綱紀にして人道の標的なり。大義明かならず、名分正しからざれば、綱紀壞れ標的墮ちて、國家紊亂し人道類廢し、其の國危亡せざる莫し。而して我が大日本の國體に於ては、特に其の尊重すべきを見るなり。南北兩朝の正閏に關しては、水戸義公山崎闇齋以來、大義名分上より南朝を以て正統と論定し、識者擧げて之に従ひ、國論又一致し、此の精神は遂に皇政興復の偉業を成すに至れり。此れ二百年來歴史の證明する所にして、今新に理論を述べざるも、此の大義名分が我が國體の精華たること、復た言を待たず。是を以て、今上陛下は、近年に及び義公に正一位を追贈せられ、維新以來政府も亦此の主意を採り、文部省は創立以來今日に至るまで、中學校所用の日本歴史には、南朝の正統なるを承認して之を生徒に課せしめ、正統天子に奉事するの大義を以て、今上陛下に奉事するの忠誠となし、父師の教ふる所、子弟の受くる所、皆此れに遵はざるは莫し。然れども今や國民の思想は専ら勢利に趨き、士人の行爲は道義を顧み

ず、甚しきは皇室に對し奉りて、敢て不軌を圖る者出づるに至れり。此の時に當りては、尤も綱常の扶植を大聲疾呼せざるべからず。而るに文部省は却て正統大義の主意を變じ、小學日本歴史を改編して南北兩朝對立の體となし、其の教師用書には「南北兩朝の間、容易に正閏輕重を論ずべきにあらず」と明言し、忠君の道も其の本を二つにするに至り、海内の萬衆をして『大義名分』の意に疑惑を抱かしめ、人心は動搖して適歸する所を失ひ、世を擧げて將さに益、綱常を蔑如し専ら勢利に依附せんとす。此れ實に國民教育の標的を失ひ、臣民統一の綱紀を紊り、國家安危の關する所にして其の禍害たるや最も大なり。是を以て吾儕は憂慮措く能はず、速に『大義名分』の明確なる國論を集め、文部省編纂の小學日本歴史を廢棄せしめ、以て人心の歸嚮を定めんと欲す。伏して冀はくは海内同感の志士翕然として來應し、以て大に援助せられんことを。

然るに二月中旬を過ぎても、勝負は決しません。牧野・松平二氏の意見書は、月末（廿八九日頃）在小田原の山縣公に郵送せられました。公は南朝正統の主張を以て三月一日に歸京せられ、意見書は行違となりましたけれども、其の翌日樞密院の決議となり、忝くも 明治天皇より宮内省に聖諭が下されました。側聞するに『南朝正統の議は、既に明治の初めに定まる。今に至りて變更を許さず。』との御主旨であらせられました。私共は此に至つて全く勝利を得ましたので、感喜に堪へませんでした。そこで同志の大木伯爵を團長として、吾々數人は吉野山に登り、

後醍醐天皇の御陵を拜して、其の事を御奉告申上げたのであります。其の時私が涙を揮つて作つた詩が、拙著憶南集に載つて居ります。

毎論正統憶南山、來哭當年天步艱、千樹櫻花看已遍、律徊陵下未言還、

其の後間もなく教科書は改正されまして、天に二日なく、土に二君なしといふ事が、判然明白になつたのであります。彼の大日本史が水戸に於て編纂せられる時にも、南北正閏が問題になり、栗山潜鋒は北朝を削らんとし、三宅觀瀾は南北兩朝をば正閏に區別することを唱へました。潜鋒の硬論は採用されなかつた。吾々思ひまするに、あの南北對立し居る時だけ正閏の事があるのであつて、其のあとは消えてしまつて、北朝の御跡など言ふべきではありません。然るに今度の教科書に就いても、閏位である北朝を全然除いてしまへとする論もありました。此の人は穂積八東氏でありました。即ち栗山潜鋒と同意見である。且つ北畠親房卿も北朝を僞主と云うて居る。此れは法律の一方から論じてゆけば正論と謂ふべきである。何んとなれば眞物が存して居れば、僞物は取りのけてしまはねばならぬ。然しながら同じく皇統を承けられた事であり、それから、それは吾々として道徳的に忍びられぬのであります。矢張り閏位として添へられておく方が穩當と思ひます。今の教科書に、南北朝と記せず、吉野朝とあるのは、穂積氏の説に従つたものであります。

要するに當時吾々が議論の相手とする者は三つに分れます。(一)三種の神器を奉持し正當の御踐祚を行はれた方を正統と仰ぎ奉る。これが穂積八東氏等の南朝正統論である。(二)勢力の強大にして其の御系統の後世まで存続せらるる方を重しとする。これが吉田東伍・浮田和民・久米邦武(並に宮内省側)の北朝正統論である。(三)南北兩朝の間に正位不正位を論ぜず、其の對立を是認する。これが三上參次・喜田貞吉(並に文部省側)の兩朝對立論である。我が黨の議論は、穂積氏の法律的正論を是認すると共に、之に道徳的溫情を加へて、北朝をも全然取り除けることをせず、之を閏位として附屬し置くことを主張したものであります。(終)

昭和十三年六月十五日印刷
昭和十三年六月二十日發行

【非賣品】

編輯人兼

東京市小石川區原町三十一番地
佐伯仲藏

印刷人

東京市神田區神保町一丁目三十四番地
高田壬午郎

印刷所

東京市神田區神保町一丁目三十四番地
株式會社 開明堂

發行所

東京市中野區城山町二十七番地
谷門精舍

終

